

自助 いざというとき、命を守る行動を

「避難行動をとる」のは、皆さん一人ひとりです。災害の危険が迫ったとき、市は避難情報を発令して避難を呼びかけます。いざというとき迅速に避難行動がとれるよう、事前に備えておきましょう。

事前の備え

◆ 危険な場所を確認する

昨年の7月豪雨災害で被害を受けた箇所には、再び災害が発生しやすい状況となっている場所があります。自宅周辺を見て回り、土砂災害や浸水の危険性を確認し「いつ」「どのような避難経路で」「どこに避難するのか」を事前に決めておきましょう。

◆ 危険箇所に備える

過去に土砂災害が発生した箇所は、梅雨時期の大雨により再び崩れる危険性があります。市では本庁・各支所で応急対策用のブルーシートを配布していますので、危険な箇所を覆うなどの応急対策を行いましょう。

災害の危険が迫ったとき

◆ 避難する

避難とは「災害から命を守るための行動」です。避難したけれど災害がなかった場合、「避難して損した」ではなく「被害がなくて幸運だった」と前向きに受け止めましょう。

- 暗い夜間や大雨の中で避難するのは危険です。日没前や大雨になる前に避難しましょう。
- 「自分の家は大丈夫だろう」「今回も大丈夫だろう」の考えは捨てましょう。
- 普段と違う様子を感じたら、すぐに避難を決断しましょう。
- 避難所等へ避難するのが逆に危険な場合、自宅の崖から離れた2階へ避難しましょう。

※災害時、市から5段階の警戒レベル3～5を発令します。警戒レベル4では、危険な場所にいる人は避難が必要です。詳しくは折込「警戒レベル4で全員避難です」でご確認ください。



避難所や災害危険箇所の確認

災害の種類・状況によって指定避難所の開設を判断するため、すべての指定避難所を開設するとは限りません。地域の危険箇所、避難所、避難経路等を事前に確認し、避難する際は、市からの防災情報（避難情報、避難所開設情報等）を確認しましょう。

また、高齢者や障害のある人の中で、専門的なケアなど福祉的配慮が必要となった人が利用できる「福祉避難所」もあります。災害時に体育館などに避難されている高齢者や障害のある人の体の状態などに応じて、市と協定を締結している老人福祉施設・障害者支援施設などの社会福祉施設に、市から入所を依頼します。

防災情報（避難情報、避難所開設情報）の入手

災害時、身を守るうえで最も重要になるのが「情報収集」です。できるだけ多くの手段で情報を取得できるよう努めましょう。

- 尾道市安全・安心メール
- 尾道市公式LINE
- 尾道市役所災害情報発信ツイッター
- テレビ、ラジオ
- ⇒NHKデータ放送
(dボタン「防災・生活情報」のメニューを選択)
- 尾道市ホームページ



▲尾道市安全・安心メール



▲尾道市公式LINE

共助 地域防災力の向上に向けて

災害が起きたときに必要な支援には、「自助」「共助」「公助」の三つがあります。中でも、住民自身が協力して自分たちの身を守る「共助」が防災の要といえます。

災害時、一刻の予断も許さない状況では、自分たちで自らの身の安全を守り、隣近所の人たちと協力しなければなりません。そのために町内会や自治会単位等で組織される自主防災組織の役割が大切になります。



災害そのときに、自主防災組織では・・・

則末町内自主防災会
副会長 毎田俊輔さん(73歳)



私が住む則末地区には、約1,000世帯、2,200人が暮らしています。則末地区3つの町内会で組織する則末町内自主防災会は、平成27年4月に設立し、今年で4年目になります。

自主防災会の主な活動には、毎年1回実施している防災訓練のほか、災害危険箇所に住む人へ早めの避難を促すチラシの配布や、高齢などの理由で一人での避難が困難な人の避難計画を立てるなどを行っています。

いざというときに住民の皆さんと協力し助け合うためには、まず「自分のことは自分で守る」ことを徹底していないと、人を助けることはできないと強く感じます。そのためにも、日ごろから地域住民と一体化して、地域の防災力を高めています。



▲防災訓練に参加する毎田さん。訓練には毎年300～400人が参加します。

平成30年7月豪雨のときには、自主防災組織が力を合わせて地域の安全を守りました。7月6日21時37分、大雨特別警報が発表され、栗原小学校近くの栗原川が一部道路まであふれ、近くに住む避難困難な人から支援の要請がありました。

避難所となっている総合福祉センターには約100人が避難。その対応に自主防災組織からは15人程が集まり、毛布等の支援を行いました。また、断水対応では、隣接する町内会や高校生と協力しながら、11日間に渡り給水活動を行いました。

自主防災組織の設立で、災害時に多くの人が自主的に行動するなど、防災意識の向上だけでなく、地域の繋がりが強まったと感じます。また、避難してきた人からも、「気にかけてくれる人たちがいることで安心できた」との言葉があり、自主防災組織を作って良かったと強く感じています。



▲断水時には1日15時間、4交代シフトで給水活動を行いました。